

MUSASHINO^{Vol. 96} *for* TOMORROW

巻 頭

地域とオペラ

川村恒明

Campus Eye

アートマネジメントのプロを目指して
～設置4年目を迎えた音楽環境運営学科～

卒業生インタビュー

素晴らしい師に出会い、導かれ
可児亜理

表紙：コンスタンティン・ガネフ教授、ジュリア・ガネヴァ教授（ピアノ）

January 2011
vol.96

謹賀新年

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井直敬



皆様には、ご健勝にて佳き初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中、わが国は政局の停滞、長期にわたる不況や困難な雇用環境、対外的には外交や安全保障などに多くの課題を残しての越年となりました。

このような社会状況の中で新しい年を迎え、教育機関、特に高い公共性を持つ学校法人は、教育研究の質保証のために教員の教育の向上を目指すFD活動、また、自己点検・評価などを一層推し進め、さらに、教育研究内容、財務・経営情報等について、社会一般に対しての説明責任を果たすことが強く求められてきました。

さて、昨年4月、本学園では先年設置した大学音楽学部ヴィルトゥオー

ソ学科一期生が卒業するにあたり、一層高度な学修を深めることを目的に、大学院修士課程に「ヴィルトゥオーソコース」を開設しました。幸い、現在9名の優れた学生が熱心に勉学に励んでおります。

さらに、本年4月には、すでに社会人として生活する者から将来音楽との何らかの関わりを希望する若い人たちまで、幅広い年齢層の方々の多様なニーズに応えるために、学校教育法に依る「大学別科」を開設いたします。

本学園では創立以来常に変わらず、音楽の専門教育機関として舞台や劇場で活躍する優れた音楽家の育成を図る一方、わが国の音楽文化の社会

的基盤強化に寄与することを教育理念として活動してまいりました。

冒頭に述べましたように、本年わが国社会、その中にある教育機関は、厳しい環境の中で名実ともに大きな転換期を迎えることと思います。私たち学園の役員、教職員一同新しい年を迎えるにあたり、社会の要請と学園の教育理念に従い、教育研究内容の質の向上と地域社会への貢献に一層の努力を傾注する所存であります。

皆様の変わらぬご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。



▲ 武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会 ブラームス「ドイツ・レクイエム」(2010年12月6日/東京芸術劇場 大ホール)

地域 オと ペラ

川村恒明
(元文化庁長官)



川村恒明 Tsuneaki Kawamura

京都府生まれ。東北大学法学部卒業。文部省学術国際局長、文化庁長官、国立科学博物館館長、日本育英会理事長、神奈川県立外語短期大学学長、(財)神奈川芸術文化財団理事長、(財)文化財建造物保存技術協会会長等を経て、現在(公財)神奈川芸術文化財団顧問、日本音楽芸術マネジメント学会理事長、(財)日本ナショナルトラスト副会長、(財)毎日書道会理事、国立大学法人横浜国立大学経営協議会委員等。著書に『文化財政策概論』(東海大学出版会)。

2011年の巻頭を飾るのは、文化庁長官を始め、教育や文化に関わるさまざまな要職を歴任されてきた川村恒明先生。クラシック音楽のみならず海外の文化事情に造詣の深い先生ならではの視点から、イタリアのオペラを例に芸術文化の振興における支援の在り方について興味深い一文を寄せてくださいました。音楽を学ぶ我々も、励ましをいただくのみならず、芸術を後世に伝えるための手立てに思いを巡らせてみたいものです。

イタリア各地の音楽祭

昨年秋、北イタリアのパルマを中心に開催されているヴェルディ・フェスティバルを訪れる機会を得ました。10月中旬とはいえ、はや秋色も濃く、街路に落ち葉の舞う毎日でしたが、古い街並みにはフェスティバルのポスターが溢れ、ショウウィンドウには記念グッズはもとよりこれまでの上演時に使用された主役の衣裳などが数多く展示され、行き交う各国からの観光客とあいまって、非日常的な祝祭の雰囲気には満ちていました。

ジョセッペ・ヴェルディは1813年、この近郊のロンコレ村に生まれました。ワグナーと奇しくも同年に生まれた彼が不世出の大作作曲家として「ナブッコ」、「椿姫」など数々の名作オペラを送り出し、イタリア統一に

も大きな精神的影響を与えたとされていることはご承知のとおりです。このフェスティバルはいうまでもなく彼を記念し、彼の名作オペラの上演を中心に毎年10月に開催されています。この年はパルマのレッジョ劇場で「シチリアの夕べの祈り」、「イル・トロバトーレ」、彼の生地のごく近くのブッセートのヴェルディ劇場で「アッテラ」の3作が計19公演、上演されました。いずれも屈指のソリストを揃え、コーラス、オーケストラとも極めてレベルの高い熱演でした。

イタリアでは、このフェスティバル以外にも、趣向は多少違っててもこのような音楽祭が毎年各地で開催されています。アドリア海沿岸のペーザロでの巨匠アルベルト・ゼッタ率いるロッシーニ音楽祭、イオニア海側のヴィアレージョでのプッチーニ音楽祭などがその例ですが、いずれもその舞台はパルマ同様の地方都市で、しかも高い評価を受けています。

芸術文化と事業仕分け

もちろんイタリアとわが国では、社会におけるオペラの位置づけを含め、歴史的・社会的事情があまりにも異なりますから、両者の事情を一概に比較することはほとんど意味のないことと思いますが、それにしてもこうした折の熱気を見聞するにつけ、



▲ 武蔵野音楽大学オペラ公演「コジ・ファン・トゥッテ」



▲ レッスン風景 (エレナ・アシュケナージ教授)

一昨年秋に行われた「事業仕分け」における一連の議論をご紹介しつつ、改めてわが国の状況についていくつか考えてみたいと思います。そのひとつは、特に地方都市におけるこうした芸術活動に関する国と地方の関わり合いの仕方であり、もうひとつはそのことに関連してそうした場合の経費負担の問題です。

「事業仕分け」はこの年('09年)「変化」を旗印に久しぶりに本格的政権交代を果たした現政権が、発足早々の目玉事業として打ち出した国の行政全般にわたる大掛かりな見直し作業であることはすでにご承知のとおりです。国が行う芸術文化振興事業についても、いろいろな角度から見直しが行われました。席上、仕分けられる側の文化庁が、わが国の実情として「特に芸術文化については大都市部、特に東京圏とそれ以外の地方との間に非常に大きな格差がある」、「一極集中になっている」以上、その是正のために国が積極的な施策を講じることは必要として、これまで国が進めてきた地方の主要な公共ホール等が行うオペラ公演などの地域文化振興事業補助の継続を求めました。最近では地方分権、地域主権ということが強く主張されるようになっていますが、歴史的経緯からやはり国が何事によらず大きな役割を果たしているのがわが国の現実です。

これに対し、仕分け人からは激しい異論が続出しました。「(オペラなどの優れた公演は)一点突破型の首都圏で展開され、地方はそんなことではなくて、長い歴史と伝統の中から

培われてきたものをいかにそれぞれの地方固有のものに育てていくのか」ということであり、「オペラの内容を、中央と違う工夫をしたところを応援することによって、それで(芸術文化の)地域間格差が解消されるのか」などの疑問が出されました。さらにこれらのホールは「地方自治体が自分で作ったもの。そうであれば地方自治体に任せればいい」、「地方が自らのリスクを負って作ったものについて、それを(国が)支援するという形ではなくて、とことん自らの知恵と努力で何ができるか、突き詰めて考えることを(地方に)今やらせることが一番大事」というわけで、結局こうした国の補助事業(地域文化振興事業)については、「予算の大幅な縮減」ということに仕分けられてしまいました。

公的支援の主体は？

次にこうした事業の経費は誰が負担するのかということです。さきほどのパルマの街は、古代ローマのエミリア街道以来の歴史ある街ですが、現在は人口20万人足らずの小都市に過ぎません(パルマ県として40万人

余、その属するレッジョ・エミーリア州全体で450万人)。たまたま私が暮らす藤沢市は人口40万(その属する神奈川県が900万)、パルマからミラノまで急行で1時間半、藤沢から東京都心まで1時間と同じような地方都市です。

パルマの音楽祭が街の年1回の最大の祝祭、町おこしの大事業であることは良く分かりますが、それにしてもこの小都市がこれだけレベルの高いオペラをなぜ毎年数多く上演することができるのでしょうか。それらのチケット代は高い席で80ユーロ(約1万円)、安い席では30ユーロ(約4千円)位、しかもいずれも席数は極めて限られた小さな劇場で、ヴェルディ劇場に至っては300席しかありません。1公演当たりの上演日数がいかに多くても、これでは入場料収入でその直接の制作経費も補うには足りないでしょう。さらに、使われているのは(今年は使われなかったレッジョ・エミーリアの市立劇場を含め)いずれも19世紀の前半から後期に建設された古い劇場ですから、これらの劇場を快適な上演空間として長年にわたって維持していく経費はさらに膨大です。

さきほどの事業仕分けでは、文化庁が「芸術文化、特に舞台芸術については、公演準備に多くのコスト等を要する。しかし1回の上演に収容可能な観客数等に限界があるといったようなことで、構造的に収支のバランスがとりにくい。また、直接・間接に様々な社会全体への便益をもたらすことで、公的支援が不可欠である」と力説していたとおりで、上質な公演となればなるほど入場料収入以外のいろいろな形での支援、特にどのような形で公的な支援が必要であることは、洋の東西を問いません。

パルマの場合も、そうした歴史的な劇場の日常的な維持管理はもとよ



▲ 管楽器専修の授業風景

り、さらにフェスティバルの運営全般について、入場料収入と地元企業や市民の支援に加えていろいろな形で公的支援が大きな役割を果たしていることは間違いありません。また、わが国と異なりイタリアは歴史的に各地域の個性を競う地域主義が濃厚で、そのことが国と地域(州や県)との役割や財源の負担にも反映されているため、こうした場合に公的支援の主体として国ではなく州や県などの自治体が登場してくることになり、またそのために地域ごとの特色ある事業展開がいっそう可能となっています。オペラの本場、ヴェルディの出生地という自負と最大の町おこし事業ということで、州や県などの自治体の力の入れようも想像できます。



▲ レッスン風景(青山聖樹准教授)

民間からの寄付

事業仕分けでは、この公的支援の在り方についても、「全体として(民間からの)寄付をもっと増やしていくというような方向も含めて、国費(公費)をまったく入れないでも何とかする方法はないだろうか」などの議論を経て、最終的には「いかに芸術文化といえども数百億の国費を投入する以上、いつの時点で投入額をゼロにできるのか見通しを示せな

れば厳しい評価をせざるを得ない」、「国が補助するというのは知識不足、そもそも文化振興は国の責務か、民間中心で行うか、議論が必要」、「寄付を増やすような政策体系を考えるべき」といった厳しいコメントが示されました。

民間からの寄付の問題では、文化庁は「(公的負担を)寄付あるいは税金のどちらで賄うのかというのは国によってかなり違っており、ヨーロッパでは、(税金による)公的な支援が多い、アメリカは寄付金が多い、日本については公的な支援、寄付いずれも各国のなかで少ない」とし、「寄付については文化の問題はあると思うが、(それを増やすための)税制上の優遇措置の拡大を図りたい」と説明していました。

民間からの寄付を増やす(そのために税制上の優遇措置を行う)と一言でいうことは簡単ですが、わが国の現状は、基本的には政府(国や自治体)ができるだけ多くを税金として集めたいと、それをもとに政府が積極的に社会保障や文化振興といった社会政策を展開することを通じて、国民(民間)にできるだけ平等、公平に再配分するといういわば「大きな政府」という仕組みを基礎としています。これに対し、寄付金を大幅に増やすということは、こうした仕組みを大幅に改め、政府の出番、事業はできるだけ少なくし、そのかわり税金という政府を経由する形ではなく、そうした公共的な事業についても国民(民間)から国民(民間)への直接の資金配分を奨励する、また、そのために民間の間の自由な資金獲得競争をできるだけ認めるという形(「小さな政府」)に転換していくという、政府の在り方の基本にも関わることです。さきほどの国と地方との関係の問題よりもなお大きな課題といえるでしょう。

ベートーヴェンホール落成50周年記念 ベートーヴェンの夕べ

2010年10月15日(金)

ベートーヴェンホール



▲ 可児亜理(ピアノ)



▲ ミツ石潤司(ピアノ)、谷 友博(バリトン)



▲ クルト・グントナー(ヴァイオリン)
藤原由紀乃(ピアノ)



▲ 左から、荒巻友利恵(オーボエ)、岡崎耕治(ファゴット)、ジョン・ダムガード(ピアノ)、丸山 勉(ホルン)、十亀正司(クラリネット)



▲ 武蔵野音楽大学江古田キャンパス

芸術文化の さらなる発展を

このほかにも、例えばわが国の誇るべき総合舞台芸術である歌舞伎と地域社会との関わりのことも気になるところです。ご承知のとおり、歌舞伎もオペラ同様17世紀に誕生し、社会にひろく愛されました。わが国でもイタリアのオペラと同様、歌舞伎を町おこしの柱に据え、大々的に祝祭として盛り上げることは、香川県琴平町の「四国こんびら歌舞伎大芝居」のような例もないわけではありませんが、やはり規模も小さく、限られたケースでしかありません。さ

きほどご紹介した事業仕分けでもそうしたことを念頭に置いたと思われる発言があったことは注目すべきですが、いわゆる普遍芸術としてのオペラと固有の伝統芸能としての歌舞伎という位置づけを含め、このあたりも考え始めればいろいろのことがあり、それは別の機会に譲りたいと思います。

ともあれ、以上に述べてきたことについて、皆様はどのようにお考えでしょうか。そこにはもちろんいわゆる「正解」というものではありません。歴史的事情を背景に、「国」の在り方や地域における人々の営みの現実に関わる多様な選択肢の問題と捉えるべきかもしれません。むしろわが国の場合は、それ以前に、事業仕分けでやや長々しくご紹介したように、社会的には芸術や文化の振興そのものについて、どこか冷ややかで厳しい意見が特に最近目立つようになってきていることが問題でしょう。

しかし、オペラや歌舞伎を含む芸術文化こそは、われわれの生存に不

可欠のものであり、人々に生きる喜びと感動、真の豊かさや安らぎをもたらす最大の社会資産、公共資産であることには変わりありません。急激に変動しつつある21世紀社会のなかで、こうした厳しい社会状況を受けとめながら、それらがさらに確実に発展し、次代に受け継がれていくための公共的方途を常に模索していく必要があります。なお、最後に付け加えれば、先ほどの事業仕分けで大幅縮小とされた国の事業は、その後のさまざまな議論、関係者の努力により、形を変えつつ今後も着実に継続が図られようとしています。



▲ 入間キャンパス

・音・楽・余・話・ ピアノの前で30数える巨匠

ピアニストは舞台に出て、喝采の中、ピアノの前に座る。聴衆は静まる。が、彼は心の中で、ゆっくりと数を数え始めた。1…2……やがて、なぜ演奏が始まらないのか、いぶかしく感じた人々が遠慮がちにささやき始め、ほどなく客席全体がざわついてくる。しかし彼は、さらに数え続ける。15…16…すると今度はざわめきが次第に弱まり、29…30…静けさが訪れた。そして、ついに彼は予定の曲目を開始した。リスト作曲 ピアノ・ソナタ 短調。水を打ったような静寂の中に響くピアノニッシモのG音…これは、当時50代であったスヴァトスラフ・リヒテルの、モスクワにおけるリサイタルでの実話である。

彼にとって、リストのソナタは若い頃からのレパートリーであった。そもそも彼が22歳でネイガウスに弟子入りした時、最初に弾いたのもこの曲であり、それを聴いたネイガウスは一瞬にして若者の才能を見抜き、世紀の巨匠であることを明言したのである。

ところが当のリヒテルは、この曲に関して、その後も長年、自らの演奏に満足できず、演奏法のみならず、それをリサイタルの最初に弾くか最後に弾くか、どのような作品と組み合わせるかなど、聴衆に曲の意味をしっかりと伝えるための試行錯誤を続けていた。冒頭に述べた珍奇なハプニングも、彼のそうした「実験」の一つであり、結果としてこの試みは大成、演奏者本人

もこの日の演奏に満足したのである。「聴衆は、いつでも一人ひとり、個別の事情や思いを抱えて演奏会場にやって来る。しかし自分がステージで30数える間に、それらの人々が一つにまとまり、演奏の成功を招いた」というのがリヒテル本人の見解であった。

リヒテルについては本誌でも何度か述べたが、彼との親交は、私と我が妻ジュリアにとって、何にも代えがたい幸運であった。その圧倒的な演奏と、一言一句、一挙一動の記憶は年月を経て今なお鮮明である。

(訳: 重松万里子)

コンスタンティン・ガネフ
(本学客員教授)

アートマネジメントの プロを目指して

～設置4年目を迎えた音楽環境運営学科～

コンサート、オペラなどの音楽芸術活動を支えるのに必要なプロデュース能力、マネジメント能力を磨くことを目標に2007年に設置された「音楽環境運営学科」。4年目を迎えて全学年が揃うとともに、今春、初の卒業生を送り出すこととなりました。音楽環境運営学科ならではのカリキュラムや実習等について、同学科の1年生から4年生までの4名に集ってもらい、中川俊宏教授の司会のもとお話を伺いました。
(2010年11月収録、文責編集部)

れだけでは足りない、マネジメントを行う人材も音楽が発展して人々の生活の中に広がっていく上では必要ではないかということで、この音楽環境運営学科が生まれました。世の中の流れとしても、国の文化政策などでも、マネジメント人材を育成することの必要性が指摘されています。そうした背景のもと、将来の日本の音楽文化を発展させていく、リードしていく人になってもらいたいということで、皆さんには日々勉強してもらっています。



中川俊宏教授 *Toshihiro Nakagawa*

文化庁芸術文化調査官、国立文楽劇場企画制作課長等を経て、現在、武蔵野音楽大学音楽環境運営学科教授。音楽環境運営研究、劇場運営論、他担当。

学科設置の目的

中川 武蔵野音楽大学は、これまでに多くの演奏家、作曲家、教員、音楽研究者を育ててきました。しかしながら、音楽文化の発展のためにはそ

特色ある多彩な授業

中川 武蔵野の中でも本学科の授業内容は少し特殊です。これまで受けた授業の中で、好きなもの、印象に残っているものを聞かせてください。

比留間 私は、「舞台技術概論」です。オーチャードホールの照明の実習や本学バッハザールでの実習が、今後役に立つような授業でした。発表会などで舞台に立つことは多いのですが、裏の仕事はなかなか見られないので、とても貴重な経験でした。

坂野 私が好きなのは、「劇場音響概論」です。前期では新国立劇場で実際のオペラのゲネプロを見せていただいたり、本物の機材を使って指導していただいたりしてとても勉強になりました。また、「広報・資料製作」という授業では、プログラムやチラシを制作する上でのテーマやコンセプト

トが求められ、見てくださる方々にどういことを伝えたいのかというこを考る良い経験になりました。

芦川 「音楽芸術運営実習Ⅰ」です。学内のホールだけでなく、東京オペラシティなど外へ出て実際に仕事を行うという授業です。今までの机上の勉強というスタンスから、実習は外に出ていくというイメージで、職業に直接結びついているという実感があります。「アートマネジメント論」では、アートマネジメントの核心を突いた勉強をさせていただいています。美術、音楽にとどまらず、あらゆる



比留間美来 *Miku Hiruma*

東京都出身。日本橋女学館高等学校卒業。現在、武蔵野音楽大学音楽学部音楽環境運営学科1年在学中。





▲ コンピュータ音楽の基礎も学ぶ

る芸術をいろいろな方向からどう盛り上げていくかというお話は、とても興味深いですね。

青木 私も3年生のときに受講した、「アートマネジメント論」が印象に残っています。授業の一環で劇団



坂野 遥 Haruka Banno

東京都出身。広尾学園高等学校卒業。現在、武蔵野音楽大学音楽学部音楽環境運営学科2年在学中。



芦川 祐美子 Yumiko Ashikawa

東京都出身。武蔵野音楽大学附属高等学校卒業。現在、武蔵野音楽大学音楽学部音楽環境運営学科3年在学中。

四季やサントリーホール、森美術館などで働いている方々の生の声を聞くことができ、とても勉強になりました。今年受講している「演劇論・演出論」は、題材を声に出して読むことが中心の授業です。最初は小学校の音読のように感じましたが、声に出すことはコミュニケーションの基礎。どう読んだら相手に伝わるか、言葉ひとつでもそれを考え演出して表現することが大切だということを教わりました。

現場でのさまざまな体験

中川 本学科の授業は、現場での経験が積めるようなカリキュラムを多く設けています。どのような体験や実習をしましたか。

青木 「音楽芸術運営実習Ⅱ」で、音楽のマネジメント事務所で2週間実習してきました。チケット購入の電話を受けたり、ひたすらチラシを折ったり、パンフレットを売ったり、ホールで案内をしたりしました。社会へ出て初めて身に付くこと、学ぶことが多いことを実感し、とてもいい経験になりました。つい先日は、学芸員課程で江古田キャンパスの楽器博物館に2週間ほど実習に行ってきました。

この学科の特徴は、生のものを見る機会、外に行く機会が多いという

こと。オペラのゲネプロを見せていただいたり、普段は見られないコンサートのリハーサルの入りから終演までの流れを、身をもって肌で感じて勉強することができるのが一番の魅力だと思います。

芦川 授業としてではなかったのですが、先生の紹介で劇団「スタジオライフ」の公演を見に行っただけに、そのお手伝いをさせていただきました。現場の空気を吸って、いろいろな仕事を任されるというのは初めてのことで、運営する側を経験できただけでなく、実際にそこで演じていたり、演奏していたりする人の声を聞けてためになりました。

坂野 2年生は、大学の中のコンサートのお手伝いなど学内での活動が多いのですが、今年の入間ミュージックフェスティバル(学園祭)で初めて展示参加しました。この学科がどういう勉強をしているのか、どういう学生たちが学んでいるのか、ということを発表するいい機会だと思い参加させていただきました。学科紹介の映像やパソコンでの作品の発表、絵本の制作など、幅広い分野での展示をし、企画として1つのことをやり遂げたという達成感は何物にも替えられません。

比留間 1年生はまだ本格的な実習というのではなく、外に出たの初めての实習は見学実習でした。新潟市民芸術文化会館(りゅーとぴあ)、軽井沢のメルシャン美術館、草津音楽の森国際コンサートホールなどを見学させていただきましたのですが、観客としては入れないような所まで案内していただき、興味深く学ぶことができました。

仲間たちと刺激し合う日々

中川 最後に、音楽環境運営学科の

雰囲気、あるいは音楽環境運営学科そのものについてどんな感想を持っているのかを話してください。

比留間 1年生は新聞の切り抜きを作って回覧するような共同作業をしていることもあり、皆で行動することが多いですね。一緒に研究室へ行く機会も多く、研究室へ行ったら先輩方が明るく迎えてくださって、ここでも楽しく過ごしています。



▲ ミキシングルームでの授業風景

坂野 2年生になって授業数も増え、より専門的なことを学ぶ機会も増えていますが、授業でわからないことがあったりしても、先輩から気軽に話を聞くことができます。先輩たちを身近に感じることで刺激になる部分もたくさんあります。信頼できる先輩、仲間たちに恵まれて、とても充

実した大学生活です。

芦川 3年生は5人という少数で授業を行っていますが、少人数だからこそそのメリットがあると思います。仲間同士がすごく近いし、先生とのコミュニケーションも密で、それが音楽環境運営学科の強みになっているのではないのでしょうか。3年生の仲間たちはみんな個性が強く、それぞれが興味のある分野を持っていて、お互いに刺激し合いながら成長していると感じています。

青木 1年生のときに、他の学科の人に「音楽環境運営学科って何をしているの?」と聞かれて、「マネジメントを勉強している」と答えたのですが、言われたほうも具体的に想像できないし、私も言いながら明確なイメージができていませんでした。でも、1、2、3年生と段階を踏むにつれ、ジグソーパズルがどんどん完成していくように、4年生になって外に出たとき、現場に出て必要な知識が身につくようなカリキュラムだったのだなということを感じることができました。

中川 大学の中で学べることと、大学の中では学べないことがあり、その両者をカリキュラムの中で上手く



青木紗由莉 Sayuri Aoki

埼玉県出身。埼玉県立伊奈学園総合高等学校卒業。現在、武蔵野音楽大学音楽学部音楽環境運営学科4年在学中。

こなしつつ現場で役に立つ人材を育てたいというのが我々の願いです。皆さんには、今後ともそういう気持ちで頑張ってほしいと思っています。



▲ 入間キャンパスにて

音楽の万華鏡 14

来日オーケストラの個性と日本のオーケストラ

世界各国のオーケストラが毎年来日して、その様々な響きや演奏スタイルを満喫できるのはもはや当たり前の感がありますが、その萌芽と言えるものは1950年代後半に見られます。1956年にウィーン・フィルが初来日したのに続いて翌1957年にはベルリン・フィルが、常任指揮者に就任して3年目のカラヤンの指揮で初来日、翌1958年にはレニングラード・フィルが初来日、翌1959年にはチェコ・フィルが初来日しています。チェコ・フィルの演奏に

「ブラハの教会のファサードのように、きらびやかな飾りのない清潔な音」、ウィーン・フィルの演奏に「弦の繊細なヴィブラートがこころよい驚愕と戦慄をひきおこす、ベルリン・フィルとはまた違った固有のカラー」等々、感じ取った印象を克明に伝えようとする批評が見られます。

海外からオーケストラを招聘するだけでなく、日本のオーケストラも独自の響きを育み、自らの作品を発信しようとしています。たとえば、日フィルは結成の翌年の1958年にドビュッシーのオペラ《ペレアスとメリザンド》日本初演のオーケストラを担当するとともに、日本の作曲家にオーケストラ作品を委嘱する「日フィルシリーズ」を開始します。日フィルより30年前に発足したN響は、1958年には定期演奏会第

400回を迎えるのを記念して、J.S.バッハ《口短調ミサ曲》、ベートーヴェン《荘厳ミサ曲》、ブラームス《交響曲第1番》ほかドイツ3大Bの作品を演奏する一方で、作曲家グループ「三人の会」第3回発表会で、黛敏郎《涅槃交響曲》を含む新作の初演を行っています。

海外オーケストラのそれぞれが持つ響きに開眼することが、他とは違うレパートリーを開拓するとともに新たな作品を生み出すエネルギーを誘発しているのを感じます。現在は、50年前よりかはるかに多くのオーケストラが来日していますが、それぞれの個性がどれだけ受けとめられているでしょうか。

植崎洋子(本学音楽学教授)

素晴らしい師に出会い、導かれ

● 可児亜理 (ピアニスト／本学講師) ●



可児亜理 Ari Kani

東京都出身。神奈川県立鶴嶺高等学校卒業。武蔵野音楽大学卒業、同大学院修士課程修了。ロータリー財団国際親善奨学生としてミュンヘン国立音楽大学に留学。G.オピッツに師事し、マイスタークラスを最優秀の評価を得て卒業。帰国後、G.ヴァン・ヘーリのもとで研鑽を積む。1994年クララ・シューマン国際ピアノコンクール・ファイナリスト。同審査員のアルゲリッチ、J.カイザーより大絶賛を受ける。'05年から'10年にかけて調性をテーマにベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏を行い、各方面から高い評価を得る。海外にも放送録音、リサイタル、ソリストとして度々招聘される。デビューCD「聖なるピアノ」はレコード芸術誌の特選盤に選ばれた。今までに上記の他、手塚敏子、日高正枝、G.ベルゲ、L.コズベックの各氏に師事。ロータリー財団学友賞受賞。現在、武蔵野音楽大学、同附属高等学校、同附属江古田音楽教室非常勤講師。

武蔵野で出会った先生方のおかげで今の自分がある、そうおっしゃる可児亜理さん。クララ・シューマン国際ピアノコンクールのファイナリストとしての実績を持ち、ピアニストとして活躍しながら、本学講師として後進の指導にも力を注いでおられます。2005年からスタートさせたベートーヴェンのピアノソナタ全曲演奏シリーズの最終回を前にして、お話を伺いました。(2010年10月インタビュー、文責編集部)

武蔵野時代、留学生時代

邦楽のお琴は3歳から、ピアノは4歳半から始めた。ずっと並行して続けたが、中学生の時、これからは西洋音楽と向き合っていこうと決めた。

武蔵野音楽大学進学は、当時の先生の勧め。2年生になって東ドイツ出身のベルゲ先生につき、次に師事したのがポーランドのショパン音楽院から来学されていた女性のコズベック先生。大学院まで3年間指導していただいた。ショパンを中心としたレパートリーを作ろうと練習に励んでいたある

日、突然、ショパンコンクールに出場することを勧められ、冗談だと思った。国内のコンクールにさえほとんど出たことのない私が、まさか…。だが先生は本気だった。「あなたは力もついたり、レパートリーも揃っている」と。強引な後押しもあり、出場を決意。書類審査もすんなり通って、本番の舞台へ。結局、思い切ってこのコンクールに参加した経験が、その後の自分の進路を決定づけた。

大学院修了後、ロータリー財団の奨学生としてミュンヘン国立音楽大学に留学。念願だったオピッツ先生のもとで学んだ。先生との最初の出会いも武蔵野で。ベートーヴェンホールで聴いた、ベートーヴェン作品111番に鳥肌が立った。

オピッツ先生は、どんな曲を持って行っても、その場で弾いて示してくれた。ご自身の演奏経験を通してのアドバイスがとてもリアルで、何



▲クララ・シューマン国際ピアノコンクール表彰式の直後(1994年／青いドレスが可児さん、前列花束を手にしているのがクララ・シューマンの曾孫)



▲ ミュンヘン・ガルヒングシンフォニーオーケストラとブラームス「ピアノ協奏曲第2番」を共演(2008年)

よりためになった。将来私が独り立ちできるように、譜面をどのように読むかということを丁寧に教えてくださった。今でも先生とはしばしばお会いするが、「自分自身でやりなさい」と、もうレッスンはしてくれない。



▲ 恩師オピッツ先生と

ベートーヴェン ピアノソナタ全曲演奏

次の10回目となる舞台(10年12月2日)で、「ベートーヴェン・ピアノソナタ全曲演奏会」がフィナーレを迎える。始めようと思い立ったきっかけは、もともと私にとってベートーヴェンはいつも身近に感じられる、大好きな作曲家だったから。全32曲のインデックスを改めて見た時、かなりの曲を既に弾いたことがあった。全部を弾いてみたいと単純に思った。ポジターノでケンブ財団主催の「ベートーヴェン講座」に参加したことも

影響した。

このシリーズのプログラムを決めるにあたり、作品を時系列で演奏するという一般的なスタイルは避けたかった。独自のテーマとして「調性」を設定し、C-dur(ハ長調)から始まって、半音階で上がって行き、最後C-moll(ハ短調)で終わるように全10回を組んでみた。

9回の演奏会を行い、確実に自分が変わったと感じる。ベートーヴェンと関わる時間が長くなるにつれ、曲の解釈、表現の仕方など新たに見えてくるもの、気づくことが多い。聴衆の前で弾くことで、育てられていることも感じる。あと1回。もう終わってしまうのかという寂しさが募る。チャンスがあるなら、またいつか挑戦してみたい。

最後の師 ヴァシャヘーリ先生

武蔵野に來たからこそ、素晴らしい出会いに恵まれたと思う。その出会いからまた次のステップへと導かれ、進むべき道が見えてきた。この様々な巡り会いの中で、最も印象深いのか故ヴァシャヘーリ先生との出会い。ドイツから戻って武蔵野の教員になった後、教員という立場のまま先生に師事することが出来た。

ある時、個人的にショックな出来事があり、それを引きずったままレッスンに臨んでしまった。最初の1音を聴いただけで、「どうしたんだ、いつもと違うよ」と指摘された。やむなく訳を話すと、「もっと強くなりなさい。他人に左右されない強さを持ちなさい」と一言。涙が出た。この言葉は、折りにつけ思い出される。

先生は、音楽の本質を通して人間の生き様を教えてくれた最後の師。その背中をずっと見てきて、私もあのような生き方の出来る人間に近づきたいと切に思う。



武蔵野の後輩たちへ

武蔵野の良さは人を大事にすること。みな協調性があり、和の精神が息づいている。学生たちも真面目だし、きちんと挨拶が出来、学園が掲げる「3P主義」が深く根付いていることを感じる。そして、卒業してから伸びる学生が多いのも武蔵野の特長ではないか。学生時代に頑張って燃え尽きるのではなく、音楽をずっと愛し続ける人が多いように思う。たとえ演奏家にならなくても、自分自身の心の糧として、音楽を愛する姿勢は理想的な在り様ではないだろうか。

後輩たちにアドバイスするとして、人前で演奏する機会は出来るだけ持った方がいい。さらに、自分の練習だけでなく、人の演奏はCDでも何でもたくさん聴いた方がいい。人の演奏を聴くことで、自分が見えてくる。行き詰まったら、人の演奏を聴くことできっと何か発見できると思う。

私自身としては、現在の演奏家と指導者の両輪で進むスタイルを今後もずっと続けたい。大変なことも多々あるが、教えることが好きだし、教えることによって自分も前進していけると思うから。もちろん、ピアニストとしてベートーヴェンとは一生かかわっていききたい。

管弦楽団合唱団&ウィンドアンサンブル演奏会

昨年11月から12月にかけて、武蔵野音楽大学の管弦楽団合唱団、ウィンドアンサンブル、室内管弦楽団などの後期定期演奏会が、学内外で開催されました。

11月12日、2年生メンバーで構成されたシンフォニックウィンドオーケストラ(指揮:前田 淳氏)が、入間キャンパスバウハザールで演奏会を開催。続く28日には同じく2年生を中心とした管弦楽団(入間市市民会館、指揮:K.ベルケシュ氏、独奏:大学4年 二井田ひとみ(trp))が、入間市立中央公民館主催の市民コンサートに出演し、それぞれ練習の成果を、若さ溢れるサウンドで披露しました。

12月には本学管弦楽団合唱団演奏会が、入間キャンパスバウハザール(3日)、東京芸術劇場大ホール(6日/写真はP1参照)、習志野文化ホール(7日)

の3会場で開催され、山形交響楽団名誉指揮者の黒岩英臣氏を指揮者に迎え、ブラームスの「ドイツ・レクイエム」を演奏しました。独唱は、本学大学院を修了し藤原歌劇団団員として活躍している砂川涼子(ソプラノ)、同じく藤原歌劇団団員でイタリアを拠点に活躍している堀内康雄(バリトン)の両氏が務めました。宗教音楽に造詣が深い黒岩氏のタクトで、繊細で柔らかな合唱(合唱指揮:栗山文昭氏)と重厚な響きのオーケストラが見事に融和して、人間讃歌とも言われる壮大で厳粛なこの大曲を見事に表現し、聴衆の感動を誘いました。

一方、ウィンドアンサンブル演奏会は、東京オペラシティコンサートホール(12月15日)で開催され、レイ・E.クレマー本学名誉教授の指導・指揮で、K.ヴァルチック:交響曲第2番



▲ ウィンドアンサンブル演奏会

(日本初演)、J.A.ジルー:ワン・ライフ・ビューティフル、戸田 顕:サドゥン・グローリー(いずれも世界初演)を含むオリジナル作品と、サン＝サーンス:交響曲第3番《オルガン》第2楽章[最終部]など幅広いプログラムを披露。多彩な音色で表現豊かに武蔵野サウンドを繰り広げ、満員となった会場を沸かせました。

室内管弦楽団は、12月17日江古田キャンパスベートーヴェンホールで演奏会を開催(指導・指揮:K.グントナー氏)。プログラムは、ヤナーチェク:弦楽オーケストラのための組曲(1877)、モーツァルト:オーボエ協奏曲ハ長調 K.314(独奏:大学3年 與那嶺万里)他。息の合ったアンサンブルで華やかに一連の演奏会シリーズを締めくくりました。

秋を彩った公開講座・演奏会シリーズ

急ぎ足で深まった昨秋、武蔵野では実り豊かな演奏会が続きました。

まず、武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会(10月1日 ベートーヴェンホール)が、フランクフルト音楽・演技芸術大学教授として活躍中のヴィンフリート・トル客員教授を指揮者に迎え、フォーレのレクイエムをヴァイオリンとオルガンの伴奏で演奏するなど、澄んだ美しいハーモニーを聴かせてくれました①。



続く10月15日には、ベートーヴェンホールの落成50周年を記念した“ベートーヴェンの夕べ”が、同ホールで開催されました。可児亜理(pf)によるソナタ「ワルトシュタイン」、バリトンの谷 友博と三ッ石潤司のピアノで「ゲレルトの詩による6つの歌」、クルト・グントナー(vln)と藤原由紀乃(pf)によるヴァイオリン・ソナタ「春」、そして荒巻友利恵(ob)、十亀正司(cl)、丸山 勉(hrn)、岡崎耕治(fg)、ジョン・ダムガード(pf)による五重奏曲 変ホ長調 Op.16が、本学指導者の諸先生とヴィルトゥオーソ学科の学生により演奏され、豪華な演奏者と名曲とが相まって、半世紀の歴史を持つこのホールに新たな名演の1ページが加わりました(写真は



P4参照)。

またエレナ・オブラスツォワ客員教授によるメゾ・ソプラノ・リサイタル(10月18日 ベートーヴェンホール、ピアノ:三ッ石潤司氏)では、前半に繊細で陰影に富んだフランス歌曲を、後半に華麗なオペラアリアを見事に歌い上げ、今年もディーヴァの健在ぶりを示してくれました②。

さらに、ケルン放送交響楽団首席奏者、デュッセルドルフ音楽大学教授として活躍中のミヒャエル・ファウスト氏によるフルート・リサイタルが、練馬区文化芸術振興支援事業と

して開催され(10月28日 練馬文化センター小ホール、ピアノ：小池ちとせ氏)、フランクのソナタなどの名曲を幅広い音色と表現で聴衆を魅了。またジョン・ダムガード客員教授(pf)によるリサイタル③(11月8日 バッハザール)ではハイドンのソナタ3曲と

ベートーヴェンのソナタ Op.110が、美しい響きで演奏された他、アルヌルフ・フォン・アルニム客員教授ピアノ・リサイタル(11月15日 シューベルトホール)では、ハイドン、モーツァルト、シューベルトというウィーンの3大作曲家の作品が深い解釈で披



露され、爽やかな秋の夜に格調高い音色が響きわたりました。

このように多彩な秋のコンサートシリーズ、多くの聴衆に数々の感動を与えてくれたことでしょう。

華やかにミューズフェスティバル開催

日頃の勉学の成果を発表する絶好の機会として、学生が自主的に取り組んだ多彩な演奏を中心に、展示発表や模擬店など学生手づくりの学園祭“ミューズフェスティバル”が、今年も入間・江古田の両キャンパスで開催され、武蔵野の秋を華やかに彩りました。

まず、10月23日・24日に入間ミューズフェスティバルが、“Resonance～共鳴～”のテーマのもと行われました。幼稚園、音楽教室、高校、大学と



幅広い年代が集う入間キャンパスでは、それぞれの立場で創意工夫を凝らした企画を展開。バラエティ豊かな内容に、訪れた人も楽しんでいるようでした。

続く、“Freude! (歓び)”のテーマをかかげた江古田キャンパスでのミューズフェスティバル(10月29日～31日)。季節はずれの台風の直撃が心配されましたが、幸運に恵まれ無事に開催できる運びとなり学生・スタッフ一同も一安心。連日、演奏、展示公演などの真摯な研究発表から、ユニークで楽しい催しまで、さまざまな企画が繰り広げられて、キャンパス全体が音楽と“Freude!”に包まれました。

また、期間中には北島章(ob)&千田悦子(hrp)、木野雅之(vln)&小池ちと



せ(pf)、さらにエレナ・アシュケナージ(pf)&コッホ中村幸子(pf)ら本学教員・卒業生各氏によるリサイタルが開催され、豪華メンバーによる素晴らしい演奏が、両キャンパスでのミューズフェスティバルを一層盛り上げました。

こうして、今年のミューズフェスティバルも関わった全ての皆の心に意義深い思い出を刻み幕を閉じました。

レイ・E.クレーマー教授 武蔵野音楽大学就任20周年記念

～卒業生有志によるウィンドアンサンブル演奏会～

本学ウィンドアンサンブルの指導者として大きな業績を残したレイ・E.クレーマー名誉教授が1990年に初来学して以来、今年で就任20年目を迎えました。それを記念して、去る10月3日江古田キャンパス ベートーヴェンホールで、クレーマー教授の薫陶を受けた卒業生有志によるウィンドアンサンブル演奏会が開催されました。

これまでクレーマー教授のもとに学んだウィンドアンサンブルのメンバーは総勢640名にもおよびますが、この演奏会には、武蔵野を卒業後、全国各地でプロの演奏家や教育者、また吹奏楽指導者などさまざまな活躍している約150名が出演しました。学生時代に演奏した懐かしい曲を、先輩後輩と年代を超えて合同で演奏。クレーマー教授が深い愛情を持ってメンバーに送る“Play with heart”の言葉通り、それぞれの熱い想いが込められた心温まる豊かなサウンドが響きわたり、埋め尽くされた

客席からは嵐のような拍手喝采が沸き起こって、出演者、聴衆ともに大きな感動の渦に浸りました。

また、演奏会後には懇親パーティーが開かれ、230名におよぶ元メンバーたちがモーツァルトホールに集まり、クレーマー教授夫妻を囲んで時の過ぎるのも忘れ大いに盛り上がりました。この交流で同窓生同士の絆も深まり、武蔵野の“和”がまた大きく広がった素晴らしいコンサートとなりました。





武蔵野音楽学園創立80周年記念 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、創立80周年を記念して、福井直秋記念奨学基金、演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々からご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。 学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、2010年8月5日以降にご寄附いただいた方々です。勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何卒ご了承ください。

【同窓生】 岩田恵子様 大田あすか様 大山喬子様 加藤裕子様 河村陽子様 久慈佳奈様 黒木俊行様 小久保圭井子様 小島由子様 佐野幸枝様 角倉章子様 高松奈津様 豊永由美様 中村澄子様 灘波裕美様 林秀樹様 町田悦子様 山本亜津子様 【在学生・在校生ご父母】 新井清一様 三代英昭様 【教職員】 大槻恵司様 新谷好美様 高久進様 皆本和子様 皆本誠様 門馬美恵様 (他に匿名を希望される方20名)

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

(前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

コンクール・オーディション名	部門	詳細	氏名	学年・専攻
第1回 日本ホルンコンクール		第2位入賞	藤田 麻理絵	平成21年大学卒ホルン専攻
第4回 横浜国際音楽コンクール	管楽器部門 大学の部	第3位入賞	米倉 森	大学4年次在学クラリネット専攻
チェコ音楽コンクール2010	声楽部門	第3位入賞	横山 典子	平成19年大学卒声楽専攻
第22回 日本ハーブコンクール2010	アドバンス部門	第4位入賞	小島 彬	大学2年次在学ハーブ専攻
第19回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 全国大会	声楽部門 大学生の部	第3位入賞(1,2位なし)	滝沢 奈津美	大学4年次在学声楽専攻
	ピアノ部門 大学生の部	第4位入賞(1位なし)	南 沙紀	大学2年次在学ピアノ専攻
	ピアノ部門 キッズの部	入選	萩野 愛菜	大学2年次在学ピアノ専攻
第二回 日本歌曲コンクール		審査員賞受賞	今成 彩乃	附属多摩音楽教室在室 聖セシリア幼稚園在園
		第3位入賞(1,2位なし)、家永勝特別賞受賞	間山 るみ子	本特修科在籍
第15回 JILA音楽コンクール	マリンバ部門	第3位入賞	磯田 日向子	大学4年次在学マリンバ専攻
	室内楽部門	入選	長谷部 玲奈	大学3年次在学クラリネット専攻
第11回 日本アンサンブルコンクール	室内楽部門	優秀演奏者賞 アルノ出版社賞受賞	松永 唯	大学3年次在学クラリネット専攻 本高校卒
			西村 葵	大学3年次在学フルート専攻
			渋谷 亜矢子	大学3年次在学オーボエ専攻
			三井 崇裕	大学3年次在学クラリネット専攻
			望月 愛見	大学3年次在学ホルン専攻
第9回 ブルクハルト国際音楽コンクール	ピアノ部門	奨励賞受賞	配島 亮	大学3年次在学ファゴット専攻
山手の丘音楽コンクール	声楽ソロ部門 大学生・一般部門	奨励賞受賞	宮崎 梨咲	大学4年次在学ピアノ専攻 本高校卒
	ピアノソロ部門 大学生・一般部門	入選	宇佐美 悠里	平成21年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程2年次在学
第16回 国際ピアノデュオコンクール	演奏部門	入選	宮崎 梨咲	大学4年次在学ピアノ専攻 本高校卒
			古賀 夏美	平成2年大学卒ピアノ専攻
第2回 東京国際声楽コンクール	大学生部門	入選	新井 庸子	平成3年大学卒ピアノ専攻 本高校卒
第11回 大阪国際音楽コンクール	声楽部門 Age-U	入選	川口 真貴子	大学2年次在学声楽専攻
	弦楽器部門 Age-U	入選	谷口 万穂子	大学3年次在学声楽専攻
第9回 TIAA全日本作曲家コンクール	室内楽部門	入選	清邊 奈菜	大学3年次在学ヴァイオリン専攻
第12回 日本演奏家コンクール	弦楽器部門 大学生の部	入選	関本 幸子	平成2年大学卒音楽教育学科作曲専攻 本大学院修士課程修了
		入選	鈴木 優介	大学3年次在学コントラバス専攻
	ピアノ部門 中学生の部	入選	永嶋 美礼	大学3年次在学コントラバス専攻
	ピアノ部門 小学校高学年の部	入選	木村 実春	附属江古田音楽教室在室 練馬区立旭丘中学校1年生
第18回 ヤングアーティストピアノコンクール	ピアノ独奏部門 Dグループ	第3位入賞	久保 美結	附属江古田音楽教室在室 白百合学園小学校5年生
	ピアノ独奏部門 Aグループ	金賞受賞	京増 修史	附属江古田音楽教室在室 京華中学校2年生
	ピアノ独奏部門 Bグループ	銀賞受賞(金賞なし)	桑原 歩美	附属江古田音楽教室在室 お茶の水女子大学附属小学校1年生
		優秀奨励賞受賞	熊澤 由唯	附属入間音楽教室在室 東星学園小学校4年生
第6回 エリーゼのためにピアノコンクール	E部門	優秀奨励賞受賞	山口 由貴	附属入間音楽教室在室 入間市立黒須小学校4年生
	C部門	大賞、E部門賞、エリーゼのために賞受賞	田川 夏帆	附属江古田音楽教室在室 東京女学館高校2年生
第13回 全国「叱られて」歌唱コンクール	こどもの部	入選	高津 紀子	附属江古田音楽教室在室
第64回 全日本学生音楽コンクール	全国大会 ピアノ部門 高校の部	入賞	田村 茜	附属江古田音楽教室在室 星美学園小学校6年生
	東京大会本選 ピアノ部門 高校の部	入選	犬飼 まお	附属入間音楽教室在室 東星学園高等学校2年生
	東京大会本選 ピアノ部門 小学校の部	第3位入賞	堀内 菜々子	附属江古田音楽教室在室 市原市立石塚小学校6年生

平成23年度から大学別科再開とバルナソス エミネンス(特修科)の募集停止

平成23年度から、大学別科の募集を再開します。23年度の授業は江古田キャンパスで実施し、実技の個人レッスン(器楽・声楽・作曲・指揮の4コース)と基礎的な関連科目(音楽理論、西洋音楽史)を開講します。

入学資格は、高等学校卒業以上で、音楽の技術および知識のレベルアップを目指す幅広い年齢層を対象としています。

入学試験は平成23年2月12日、13日です。詳細は別科入学試験要項をご参照ください。要項をご希望の方は、武蔵野音楽学園広報企画室(TEL:03-3992-1125)に電話でお申し込みください。

なお、本学バルナソス エミネンス(特修科)は、別科にその教育機能を吸収するため、平成23年度からの募集を停止します。

平成 23 年度学生・生徒募集 入学試験スケジュール

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(博士後期課程)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
大学院博士 後期課程入試	平成23年2月10日消印 ～21日消印まで	郵送のみ	平成23年 3月9日～11日

武蔵野音楽大学(音楽学部)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
1年次 一般入試 A日程※	平成23年1月14日消印 ～29日消印まで	平成23年 1月28日・29日	平成23年 2月18日～23日
1年次 一般入試 B日程※	平成23年3月5日消印 ～15日到着まで	平成23年3月15日	平成23年 3月16日～18日
3年次 編・転入学入試	平成23年1月21日消印 ～28日消印まで	郵送のみ	平成23年 2月12日～14日

- 一般入試 A 日程の受験では、国語・外国語(英または独)について、大学入試センター試験を利用できます。
 - 一般入試 B 日程の受験は、国語・外国語(英または独)について、大学入試センター試験の受験者に限ります。
- ※音楽学部 1 年次入学試験合格者のうち、成績が特に優秀な学生合計約 30 名に対して、入学金相当額を「学修奨励金」として給付します。

武蔵野音楽大学(別科)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
別科入試	平成23年1月21日 ～28日消印まで	郵送のみ	平成23年 2月12日・13日

武蔵野音楽大学附属高等学校(音楽科)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
附属高等学校 推薦入試	平成23年 1月14日～18日必着	郵送のみ	平成23年1月22日 入間キャンパスにて実施
附属高等学校 一般入試	平成23年 1月21日～29日必着	郵送のみ	平成23年 2月12日・13日

- * 入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。
- * 上記、入学試験は、江古田キャンパスで実施します(附属高校推薦入試を除く)。
- * 各入学試験要項は、郵送及び江古田キャンパスで取り扱っています。要項は無料ですが、郵送をご希望の場合は、氏名、住所、電話番号、および高校、大学 1 年次、大学 3 年次、大学院の別を明記し、切手(高校 240 円、大学 1 年次・大学 3 年次・大学院は 390 円)を同封の上、武蔵野音楽学園広報企画室 〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1 TEL.03-3992-1125 までお申し込みください。なお、別科の送料は無料です。直接電話にてご請求ください。

音楽教室(江古田・入間・多摩)

受験資格(学年は平成23年3月末現在)

導入・初級 中級・上級コース 江古田・入間・多摩音楽教室	導入 3才 初級 4才から小学校1年生まで 中級 小学校2年生から小学校6年生まで 上級 中学校1年生から高等学校2年生まで
受験コース 江古田・入間・多摩音楽教室	武蔵野音楽大学附属高等学校受験 中学校1年生以上 武蔵野音楽大学受験 高等学校1年生以上
エクセレンス・コース (将来音楽家をめざす、児童、 生徒のための高度なコース)	5才から高等学校2年生まで (江古田音楽教室のみに設置しています)

- 【入学試験】 平成 23 年 3 月 6 日(日)(各教室にて)
●ただし、エクセレンス・コースの入学試験は江古田音楽教室で行います。
- 【願書受付】 平成 23 年 2 月 12 日(土)～2月26日(土)
- 【試験科目】 実技・ソルフェージュ・面接。未就学児は面接のみ。
音楽をはじめ勉強される方は、音楽教室にお問い合わせください。エクセレンス・コースの未就学児は、実技・ソルフェージュの試験を受けてください。
- 【要項請求】 ご希望の音楽教室へお申し込みください。また、学園のホームページからも請求ができます(要項・送料とも無料)。

※その他詳細については、下記へお問い合わせください。
江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 入間音楽教室 TEL.04-2932-1111
多摩音楽教室 TEL.042-389-0711
武蔵野音楽大学附属音楽教室ホームページ http://www.musashino-music.ac.jp/music_school/

●表紙の顔



コンスタンティン・ガネフ教授& ジュリア・ガネヴァ教授

両教授は、ご夫妻で1992年より武蔵野音楽大学に着任して以来、熱心に指導に当たり、優秀な学生を多数輩出しています。

K.ガネフ教授は、ソフィア音楽院卒業、モスクワ音楽院でG.ネイガウスに師事。1956年より演奏活動を開始、多くのブルガリア初演を含む現代音楽作品、古典作品を演奏し高い評価を得ています。音楽学者でもあり、多数の本、論文、エッセイ等を出版し、本誌でも興味深いコラムを連載中。J.ガネヴァ教授も同じくモスクワ音楽院でG.ネイガウスに師事し、在学中よりピアノ奏者として多くの演奏会でオーケストラと共演。世界青少年フェスティバル「プラハの春」等、国際コンクールで最優秀伴奏者として賞を受賞しています。

また2人はピアノ・デュオの活動を30年間続けており、豊かな知識と優れた感受性で、常に世界のピアノデュオ界をリードし、ロシアをはじめヨーロッパ、アメリカ、日本等各地で演奏し高い評価を得ています。音楽教育者としても広く知られ、数多くの門下生が著名なコンクールで入賞しています。

現在、武蔵野音楽大学客員教授。

編集後記

2011年が幕を開けました。本年は、フランツ・リスト生誕200年、グスタフ・マーラー没後100年にあたる年。武蔵野音楽大学においては、4月から大学別科が開設されます。またキャンパス・アイで紹介した音楽環境運営学科は設置から4年が経ち、今春初めての卒業生を送り出します。同学科が目指すのは、音楽芸術活動を力強く支える人材の育成。いみじくも巻頭では川村恒明先生が、オペラを例に芸術文化をいかに発展させ、次代へ受け継いでいくかというお話を披露してくださいました。皆さんにとっても、実り多き一年になりますように(編)。

磬

2代目 秦蔵六作 日本 高さ75cm

磬は、仏教伝来とともに日本に伝えられた法具であり、その祖形は古く古代中国まで遡ることができる。「磬」という漢字は、「石」と「殷」を組み合わせで作られたもので、「受」には打つという意味があることから、「打ち鳴らす石製の楽器」を表している。「磬」という字源に表されている通り、中国の磬は、元来石製もしくは玉製であった。中国には古くから、楽器の素材によって「金(金属)・石・竹・土・革・糸・木・匏」の8つに分ける独自の楽器分類法「八音」があり、この中でも磬は金部ではなく石部に属されている。

日本では銅製(鉄製の少数例もある)が一般的で鑄造である。初期の頃には片面のみに装飾を施した片面磬も見られたが、次第により華やかな両面磬が作られるようになった。桴で打つために模られた中央部の撞座およびその左右には、仏教と縁の深い蓮をモチーフとした蓮華文や蓮唐草文、蓮池文の他、宝塔文、孔雀文、鳳凰文など様々な装飾例が見られる。

写真の楽器は、幕末から明治にかけて活躍した金工師、秦蔵六(1823～1890)の長男で、2代目(1854～1932)の作である。現行では一般的な連弧式山形を成

しており、両面に葡萄唐草文が施されている。初代蔵六は、孝明天皇の銅印、徳川慶喜の征夷大將軍の金印の鑄造を手がけたことでも知られる。2代目蔵六は、初代の作風を受け継ぎ、明治6年(1873年)には、宮内省の命を受けて、初代とともに明治天皇の御璽・国璽を鑄造した。この国璽は、3寸方形の金印で「大日本国璽」の5文字が刻されており、現在も勲記に用いられているものである。「蔵六」の名と鑄造技法は代々継承され、今日に至っている。



(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

❖ 目 次 ❖

謹賀新年 福井直敬	❶
地域とオペラ 川村恒明	❷
音楽余話 ピアノの前で30数える巨匠 コンスタンティン・ガネフ	❸
Campus Eye アートマネジメントのプロを目指して ～設置4年目を迎えた音楽環境運営学科～	❹
音楽の万華鏡 来日オーケストラの個性と日本のオーケストラ 檜崎洋子	❺
卒業生インタビュー 素晴らしい師に出会い、導かれ 可児亜理	❻
MUSASHINO NEWS	❼
❖ 管弦楽団合唱団&ウィンドアンサンブル演奏会	
❖ 秋を彩った公開講座・演奏会シリーズ	
❖ 華やかにミューズフェスティバル開催	
❖ レイ・E. クレーマー教授 武蔵野音楽大学就任20周年記念 ～卒業生有志によるウィンドアンサンブル演奏会～	
❖ 武蔵野音楽学園創立80周年記念 ご寄附をいただいた方々	
❖ 栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)	
❖ 平成23年度から大学別科再開とパルナソス エミネンス(特修科)の募集停止	
❖ 平成23年度 学生・生徒募集 入学試験スケジュール	

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発 行 ❖

学校 武蔵野音楽学園
法人

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2011年1月10日発行 通巻第96号



携帯サイト
<http://musashino.jp/>